

## コロナ禍における学内実習の取り組み

関西福祉大学看護学部 濱西 誠司

看護教育における臨地実習は、「看護職者が行う実践の中に身を置き、看護職者の立場でケアを行うことである」と定義されており（看護学教育の在り方に関する検討会第一次報告）、対象者に向けて看護行為を行う過程で、学内で学んだものを自ら実地で『使う』『実践できる』段階に到達させるために臨地実習は不可欠な過程であると位置づけられている。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大によって医療機関での実習が困難になったことを受け、「実習施設の確保が困難である場合には、臨地実習に代えて学内実習等の実施によって必要な知識及び技能を修得することとして差し支えない」との通達が出された。このことでコロナ禍でも看護教育の継続が可能となった一方で、臨床現場で求められる看護実践能力の質的水準を学内実習においていかに担保するかが各教育機関の課題となった。

「新型コロナウイルス感染症下における看護系大学の臨地実習の在り方に関する有識者会議の報告書」には、コロナ禍において臨地での実習が叶わなかった際に各大学が取り組んできた教育事例の類型が示されている。情報収集等のために患者とコミュニケーションを図ることを実践するため、遠隔会議システムを用いて実際の患者と繋いだ事例や模擬患者を依頼した事例が紹介されている。また、カルテから患者の治療状況や生活状況を把握することができるよう、模擬患者カルテを使用した事例や受け持ち患者のカルテを遠隔で利用させて頂いた事例なども示されている。さらに、看護援助の提供については学内教員等の協力を得て、シミュレーションやロールプレイなどが行われていることが紹介されていた。本学でも岡山 SP 研究会の協力を得て模擬患者を依頼したり、模擬電子カルテシステム (Medi-eye) を導入することで臨床現場における学習環境を再現できるよう努めてきた。また、看護援助の実践に関しては教員が患者役を務めることでリアリティのある援助場面を再現できるよう心掛けてきた。

多くの教育機関が学内実習に関する内容の検討と運営を行って行く中で、実際の臨床現場でしか学べないことを学内で再現することの難しさを実感するとともに、看護教育における臨床実習の重要性を再認識する機会になった。しかし、学内実習の質を担保するために導入したシミュレーターや模擬電子カルテシステム、これらを活用してリアリティのある実習を模索する中で得られた教育上のノウハウは、今後臨床実習が可能になった際にも学内演習の質を向上させることに活用することが可能である。新型コロナウイルスによる世界的な流行は看護学生から様々な学びの機会を奪ったが、一方で看護基礎教育の質の向上につながる機会となった側面もあったと考える。このような背景を踏まえ、関西福祉大学看護学部にて取り組んできた学内実習について実例を交えながら紹介していく。